opera
Osaka Prefecture University
Education and Research Archives
大阪府立大学 学術情報リポジトリ

Title	恋愛結婚と政略結婚の行く末 : バルザック『二人の若妻の手記』
Author(s)	村田, 京子
Citation	女性学研究. 2007, 14, p.1-26
Issue Date	2007-03
URL	http://hdl.handle.net/10466/10113
Rights	

http://repository.osakafu-u.ac.jp/dspace/

論文

恋愛結婚と政略結婚の行く末
—バルザック『二人の若妻の手記』—

村田　京子

バルザックは、1829年に出版した『結婚の生理学』以来、恋愛や結婚をテーマにした作品を数多く生み出してきた。しかも女性の心理を描くことに長け、同時代の批評家サント=ブーヴから「閨房の作家」と揶揄されるほどであった。1841年から42年にかけて「プレス」紙に新聞小説として連載され、42年にスヴラン社から２巻本として出版された『二人の若妻の手記』も、その系列に入る。この作品は、ブロワのカルメル会修道院を出たばかりの17歳の二人の娘が実家に戻り、やがて結婚する中で、それぞれの人生の過程 —具体的には1823年から35年までの12年間— に二人が取り交わした手紙で構成され、『人間喜劇』で唯一の書簡体小説となっている[1)]。二人の娘のうち一方は、パリの社交界の花形として情熱的な恋愛結婚をし、他方は田舎で親の決めた相手との政略結婚をするというもので、二人の結婚観や結婚生活の様子が対照的に描かれている。

ここでは、19世紀半ばのフランス社会において、恋愛、結婚、セクシュアリティがどのように捉えられていたのかを、バルザックの作品を通して見ていきたい。また、『二人の若妻の手記』は、バルザックがジョルジュ・サンドに献辞をした唯一の作品でもある。1838年２月24日から３月２日までの６日間、サンドのノアンの館に滞在し、そこで３晩にわたって彼女と「結婚と自由という重大な問題[2)]」について議論したとバルザックは述べている。それゆえ、同時期に執筆された『ベアトリクス』と同様に[3)]、この作品にはサンドとの議論から導き出されたバルザックの結婚観が反映されている。したがって、サンドとの関わりも視野に入れながら、この作品を考察していきたい。

では『二人の若妻の手記』を、物語の筋に沿って詳しく見ていくことにしよう。パリの名門貴族ショーリュー公爵の娘ルイーズと、南仏の地方貴

族の娘ルネ・ド・モーコンブは7年間修道院で一緒に過ごした後、同時期にそこを出てそれぞれ自宅に戻る。物語はパリの自宅に戻ったルイーズが田舎のルネに宛てた手紙から始まる。ルイーズは祖母から莫大な遺産を相続していたが、彼女の父親は次男にルノンクール家の名を継がせるためにその遺産を使おうと考えていた。それゆえ娘を修道女にするつもりであった。そこには、個人の幸福よりも「家」や「名」の存続を優先する貴族的価値観が反映され、ルイーズは、こうした社会の犠牲者と言える。当時、貴族の娘が結婚するにはそれ相応の持参金が必要であった。ルイーズの父親は次のように述べている。

> 「フランスでは」、と父は苦々しげに言いました。「最も身分の高い貴族の娘を持参金なしで妻にし、持参金をもらったことにしてくれる男は一人も見つけられないだろう。もしそんな夫が見つかったとしても、成り上がりのブルジョワ階級に属しているに違いない。それに関しては、私は11世紀風の［身分違いの結婚は認めない］人間だ[4]」。

このように、持参金のない娘は同じ階級の男から相手にされることはない。しかも気位の高いショーリュー公爵は、娘を格下のブルジョワ階級の男と結婚させることなど考えられず、修道女にするしかなかった。ルイーズはその親の意に反して修道院から出てきたわけだ。

社交界にデビューしたルイーズがルネに宛てた手紙の中では、ちょうどモンテスキューの『ペルシア人の手紙』のように、アウトサイダーの立場から欺瞞と虚飾に満ちた社交界が浮き彫りにされている。聡明なルイーズは、彼女の心を動かす優れた男性をそこでは到底見出せないことにたちまち気づく。

一方、田舎に戻ったルネは親の意向で、近くに住むレストラード男爵の息子ルイと結婚することになる。ルイはナポレオン軍の兵士として戦い、ロシア軍の捕虜となって辛酸を舐めた後、ようやく故郷に辿りついた37歳の青年だった。ルネは彼について、次のように描写している。

国外追放者［＝ルイ］は、［…］鉄柵のようにやせっぽちです！顔は蒼白く、苦労したせいか無口です。37歳で、彼は50歳のように見えます。かつて若かった頃の黒々とした美しい髪には、ひばりの羽のような白髪が混じっています。彼の青い美しい眼はうつろで、耳は少し遠いのです。どことなく憂い顔の騎士といった感じです。(220)

ルイは、悲惨な生活によって肉体的にも精神的にもすでにエネルギーを失った人物であった。そして、ルネもまた、「家」の犠牲（弟が「家」を継ぐために彼女の相続財産を放棄させられる）となった「持参金のない貴族の娘」であった。したがって、持参金なしで嫁にするというルイの父親の申し出を受け入れるか、修道院に戻るかの二者択一の選択しか彼女には残されていなかった。やむを得ずルネは、20歳年上の「老け込んだ青年(vieux jeune homme)」(258) との政略結婚を承諾する。ルネの婚約を知ったルイーズは彼女を激しく非難する。

まあ、もう結婚するんですって！［…］たった一月のうちに、見知らぬ人と、その人のことを何も知らずに結婚の約束をするなんて。その人は［…］病気がちで、退屈で、我慢ならないかもしれません。ルネ、あなたをどうしようとしているのかわからないの？ 彼らにとって、栄えあるレストラード家を存続させるためにあなたが必要なだけで、それ以外の何ものでもないのよ。［…］あなたは修道院を出て別の修道院に入るだけのことよ！私はあなたのことを知っています。あなたは卑怯です。あなたは子羊のような従順さで夫婦生活に入ろうとしています。(228)

修道院ではルイーズと同じように情熱的な恋愛に憧れていたルネだが、弱冠17歳でその夢を断念し、夫に尽くし、夫をひとかどの人物にしようと決意する。ルイとの結婚式の知らせを受けたルイーズは、情熱や詩情を失って「卑俗でありふれた結婚の倦怠」、「空虚な生活」(228) に身を沈めることに甘んじるルネを批判している。

ルイーズは「お金持ちで、若くて美しい私は愛しさえすればいい。愛は

私の人生となり、私の唯一の関心事になりうるのです」(232) と、愛情至上主義を高らかに謳う。そのうち彼女はスペイン語の家庭教師に興味を抱くようになる。彼は小柄で醜い顔つきだが、誇り高い物腰と情熱的な瞳の持ち主で、寡黙で謎めいたこの男にルイーズは次第に惹かれていく。彼は実は、モール人の血を引くスペインの古い貴族の家柄に生まれたドン・フェリーペ・エナレスで、スペインで大臣として活躍するものの、国王に逆らったために祖国を逃れてパリに来ていた。彼は自分の身分や財産をすべて、さらには許婚までも弟に譲って一介の家庭教師として暮らしていた。しかし間もなく、サルディニアに残った領地のおかげでマキュメール男爵を名乗ることができ、故国から十分なお金が届いて身分相応の生活ができるようになる。

フェリーペの正体を知ったルイーズは、彼の彼女に対する情熱的な愛情と、故国で死刑を宣告された身であるというロマネスクな状況 —それはまさに、スタンダールの『パルムの僧院』や『赤と黒』を彷彿とさせる—に刺激を受けて彼に夢中になる。フェリーペは彼女の姿を一目見ようと毎晩、命の危険を冒して高い塀によじ登るなど、若い娘が夢見るような恋のアヴァンチュールが繰り広げられる。彼女はフェリーペに対して、ちょうど中世の騎士道物語で貴婦人が騎士に課すような様々な試練を課し、彼に忠誠を誓わせる。ルイーズとフェリーペの関係は、彼の次のような手紙に如実に現れている。

> ルイーズさん、私はあなた自身のために、何の底意もなく愛し、あなたが完璧な愛を求めて私に課す条件をはるかに越えてあなたを愛していることをどうしても知っていただきたいのです。私が天上にまで高めた偶像よ、願わくは聞きたまえ。この地上にはあなたに命を捧げたサラセン族の末裔が存在していることを。あなたが奴隷に対するように何でも命じることができ、その命を実行することを光栄に思う男がいることを。私は何の見返りもなくこの身をあなたに捧げたのです。ひたすら身を捧げる喜びのために、あなたの眼差しのただ一つを受けるために[…]。[…] ルイーズさん、すべてを受け入れて下さい。そうすれば、あなたはこの世でたった一つ私に残された生きる道を私に与えて下さったことになるでしょ

う。私の身を犠牲にするという道を。私の首に隷属のくびきをかけたとしても、あなたご自身には何の危険もないのです。(264－265)［下線引用者］

二人は、言わば女王と奴隷の関係にあり、フェリーペはルイーズに完全に隷従している。フェリーペの貴族の家柄、さらには持参金なしの結婚を彼が喜んで受け入れたことで、ルイーズの父親の承諾を得て二人は晴れて結婚することになる。彼女は身分、財産、さらには愛情の面でも理想的な恋愛結婚を実現したと言えよう。二人の支配と隷属の関係は結婚後も同様に続くことになる。

一方ルネの方は、自らの置かれた状況を顧みて、結婚制度そのものへの異議申し立てを行っている。

もし愛がこの世の命であるならば、どうして厳格な哲学者たちは、結婚の中で愛を抹殺してしまうのでしょうか。「社会」が「女」を「家族・家庭（Famille)」のために犠牲にするのを至高の法則とみなし、こうして必然的に、結婚の中に暗黙の戦いを生み出すのはなぜなのでしょう。このような戦いを社会が予期し、それが危険なものであることを察知したために、社会は男に権力を与え、私たち女に対抗するために武装させたのです。私たちが愛情の力により、あるいは秘められた憎しみに執着することで、すべてを破壊する力を持っていることを見越していたからなのでしょう。[…] 法律が老人によって作られたことに女性は気づいています。彼らは賢明にも、情熱を伴わない夫婦愛も決して私たちを堕落させるものではないと宣言しています。また、男が女を自分の物にすることが一旦法律で認められると、女は愛情がなくとも身を捧げねばならないと定めているのです。家族のことばかりを念頭において、彼らは自然にならって種の保存のみに気を配っています。かつて私は一個の人間でしたが、今では一つの物に過ぎません！(278)［下線引用者］

女性の意に反して「家族・家庭」のために、「種の保存」のために結婚を強いるばかりか、愛情もないのに夫に身を捧げることを女性に強制する社会そのもの —要するに男性原理に基づいた社会— をルネは糾弾してい

る。それは、バルザックの『三十女』の中で女主人公が、見ず知らずの男との結婚を「密やかな売春[5]」と呼んだものだ。また、引用最後の「かつて私は一個の人間でしたが、今では一つの物に過ぎません！」というルネの叫びはまさに、ジョルジュ・サンドの『アンディアナ』で主人公が夫に向かって言う抗議の言葉と重なる[6]。しかし、アンディアナのように夫に反抗するのではなく、ルネは最後には、ボナルドの思想に与して結婚制度の意義を認めて、次のように言っている。

> 若い年頃の私たちは理想と現実が一致すると思いがちです！ 私はいま、庭の岩蔭に一人座って物思いに耽っていますが、その結果、次のような考えにいたりました。結婚生活における愛情は一種の偶然に過ぎず、その上にすべてを支配する法則を打ち立てることは無理だということです。私の信奉するラヴェイロンの哲学者［＝ボナルド］が「家庭」を唯一可能な社会的単位とみなし、いつの時代もそうであったように、女性を「家庭」に服従させているのはもっともなことです。私たちにとってはおぞましいこの大問題の解決は、最初に生まれる子どもの中にあるのです。だから、たとえそれが私の激しく貪欲な魂に糧を与えるためだけだとしても、私は母親になりたいと思います。(279)［下線引用者］

ルネは結婚を永遠に解消できない社会的営みとみなし ―実際当時、離婚は禁じられていた―、愛情を結婚の前提とすることの危険性を認め、社会の基盤となる「家庭」を形成するために、女性が男性に従属する形を取らざるを得ないと考えている。当時、女性は肉体的にも精神的にも男性より劣った存在とみなされ、医者や生理学者の言説もそれを補強するものであった。したがって、19世紀フランスでは「男性に服従することのうちにこそみずからの喜びと存在理由を見出すように[7]」と、医者自身が女性に勧めていた。ルネはこうした考えを内面化していたが、他方で彼女の「激しく貪欲な魂に糧を与えるために」―言い換えれば、行き場のない情熱を母性愛に昇華するために― 子どもの誕生を待ち望むようになる。このように、彼女は「理想」と「現実」の二項対立の中で「現実」を選択し、「理想」を追求するルイーズとコントラストを成している。

この小説では、ルネとルイーズは様々な形で対照を成し、ルネは自らを「理性」と「堅苦しい義務」の化身とみなし、ルイーズを「想像力」と「狂気じみた愛」(331) の表象としている。また、ルネは愛情を小出しにして夫を操り、「母親」として「彼の教育を仕上げ」(256)、夫を県選出の代議員に、ゆくゆくは、当時最高の名誉職である貴族院議員に仕立て上げる算段をしている（実際ルイはルネの助力によって男爵から子爵、伯爵まで地位が上がり、最後には貴族院議員まで登りつめている)。ルネのこうした思惑に、ルイーズは「賢明な算術の無味乾燥さ」を見出し、「あなたの計算は堕落の匂いがする」(260) と批判している。さらに彼女は、ルネの「計算」に対して、愛の「無限」「神性」を対峙させている[8]。実際、フェリーペはルイーズの肖像画を聖母マリアと主イエス・キリストの間に置いて、その絵姿を眺めることで「完全で完璧、無限の幸福」(275) を感じるほど彼女を崇拝し、神格化していた。

ルイーズはフェリーペの至高の愛を享受し、さらには結婚後に味わった官能的な快楽に酔いしれて、ルネに次のように言っている。

> あなたの全く社会的な結婚と、幸福な愛そのものの私の結婚は、有限が無限を理解できないのと同様に互いに理解しえないものです。あなたは地上に留まり、私は天上にいます！ あなたは人間の領域に、私は神の領域にいます。私は愛によって君臨し、あなたは計算と義務によって君臨しているのです。私はあまりに高いところにいるので、もし墜落でもしたら粉々に砕けてしまうことでしょう。(307) [下線引用者]

ルイーズは、ルネの「地上の愛」に対して自らの「天上の愛」を誇らしげに謳っているが、彼女の最後のセリフにあるように、「墜落」の予感がその未来を予言している。

ルネの方はただ一人、岩蔭のベンチに座ってルイーズの熱狂的な手紙を読みながら、夫に尽すだけの自らの人生を不毛だと嘆く。彼女のお気に入りの場所である丸裸の荒涼とした岩がその心象風景となっている。その彼女に突然、転機が訪れる。

あなたの幸福な結婚を享受しながら［…］、あらんかぎりの力でそれを羨ましく思いながら、私は子どもの最初の胎動を感じたのです。それは私の命の深みから発して、私の魂の深みに反響を与えずにはいられませんでした。［…］この世で私しか知らない、そして神様と私だけに秘められたこの幸福。その神秘が私に向かって告げたのです。この岩はいつの日か花に覆われ、家族の楽しげな笑いがそこに響き渡り、私の母胎はついに祝福を受けて、生命を大量に生み出すであろうと。(310)

この場面はルネが妊娠に初めて気づく場面だが、彼女の母胎はまさに「大地の胎内」と同一視されている。結果として彼女は3人の子どもに恵まれ、子どもが成長するにつれて、荒涼としたその領地は次第に緑に覆われ、豊饒の地へと変貌していく。ルネは言わば、豊饒の源となっているのだ。

これまでは、フェリーペとの情熱的な恋愛の過程をつぶさにつづったルイーズの手紙が、ルネの手紙より数においても長さにおいても圧倒的にまさっていたのが、今後はルネの手紙が数を増し、その中でつわり、出産、子どもの養育が事細かに描写される。ルネの母性愛の描写に関しては、ジョルジュ・サンドが惜しみない賛辞を寄せている。彼女はバルザックに宛てた手紙の中で、信奉するピエール・ルルーの輪廻転生説にならって「あなたが女で母であった前世の記憶をいまだに持っているかのようです[9)]」と述べるほどであった。例えば、ルネがつわりの時期に、オレンジへの異常嗜好を赤裸々に告白する場面では、男の作家が書いたとは思えない真に迫った描写となっている。

私はマルセイユまで時には歩いて駆けつけ、［…］小さな通りで1リアール［4分の1スー＝約12円］の半ば腐った安オレンジを貪り食うのです。その青っぽい、緑がかったカビは私の眼にはダイヤモンドのように輝いて見えます。そこには花々の姿が見え、その死臭のような匂いが全く気にならず、その匂いに神経を刺激するような風味、ぶどう酒の温かみ、えもいわれぬ味わいを見出すのです。これこそ私の一生で初めての恋愛感情（sensations amoureuses ; *P* délicieuses）か

もしれません。このぞっとするようなオレンジが私の愛（amour）です。あなたがフェリーペを欲する気持ちも、私がこの腐りかけた果物を望む激しさには及びもつかないでしょう。要するに、私はこっそり家を抜け出して、足取りも軽くマルセイユまで駆けていき、通りに近づくと官能的な身震い（tressaillements volupteuses ; *P* ineffables）にとらわれるのです。果物売りのお婆さんが、もう腐ったオレンジ（oranges pourries ; *P* gâtées）を持っていないのではないかと恐れます。私はそれに飛びつき、それを食べ、野外で貪るのです。私にはそのオレンジは天国の果実ではないかと思え、もっとも甘美な食べ物なのです。ルイが、むかつくような悪臭（puanteur ; *P* odeur）をかがないよう顔をそむけているのが眼にうつりました。(312)［下線引用者］（*P* は「プレス」紙版）

夫がわざわざ外国から取り寄せた高価で立派なオレンジには見向きもせず、ルネはマルセイユの市場の腐りかけたオレンジを貪り食う。引用下線部の「恋愛感情」「愛」「官能的な身震い」といった言葉が証明しているように、ルネは夫には抱けない愛情や官能的な喜びを妊娠の中に見出している。

さらにルネは出産の苦しみを生々しく語り、出産後の授乳の喜びを次のように描いている。

赤ん坊の唇はえもいわれぬ愛らしさ（amour）で、それが乳房に吸いつくと苦痛と同時に快楽（plaisir）を、苦痛にまでいたる快楽を、もしくは快楽におわる苦痛をもたらします。私の乳房から生命の源にまで輝きわたるこの感覚をあなたに説明することはできないでしょう。というのも、乳房は無数の光が放たれる源となり、その光が心と魂を楽しませてくれるのです。［…］ああルイーズ！　どんな恋人の愛撫（caresses d'amant ; *P* amant削除）も、この小さなばら色の手の愛撫には及びません。その手はとても優しく体をまさぐり、命にしがみつこうとするのです。私たち母親の胸から眼へと子どもが交互に投げかける視線といったら！（*P* 削除）唇でその宝物に吸いつくのを眺めては、何と甘美な夢にふけることでしょう！　赤ん坊は、［…］血と知恵を働かせ、あらゆる欲望（désirs ; *P* 削除）を越えた満足を与えます。赤ん坊の最初の泣き声を聞いたときの快い感覚（adorable

sensation）—それは私にとって、地上に太陽の光が最初に届いたようなものだったのですが—、自分の乳が赤ん坊の口を満たしていることを感じた時、その快さを再び見出しました（*P* 削除）。赤ん坊の最初の視線を受けた時もそれを感じました。そして、つい今しがた、赤ん坊の最初の微笑みの中に最初の考えを読み取って、それをゆっくり味わいながら（savourant）、そうした感覚を再び抱いたのです。坊やは笑ったのよ。この微笑み、この視線、この噛み傷、この叫び、この4つの快楽（jouissances）は無限です。(320)［下線引用者］

上記のような描写は、大胆なまでに女性の身体性を強調するもので、下線にあるように、授乳の喜びが「快楽」「愛撫」「欲望」「快い感覚」といった言葉で表され、とりわけ最後の jouissances という語は「性的快楽」を連想させる言葉である。こうした表現が積み重なることで、ルネの官能的な喜びが浮き彫りになっている。しかも、子どもを通じてルネはルイーズと同様に「無限の愛情」に達することができた。こうした母と子の密接な愛情の絆の中に、夫の入る余地は全くない。彼女は「父親ですって？もし彼が赤ん坊を起こそうとでもしたなら、殺しかねないわ。子どもにとって母親だけが世界のすべてですし、母親にとっても子どもが世界のすべてなのですから！」(321) とさえ言っている。先ほどのつわりの描写においても、腐ったオレンジを貪り食う妻の横で夫が顔をそらす場面は、ルネと子どもの世界からの「夫」ないし「父親」の疎外が象徴的に描かれている。彼女はルイーズに対しても、母親になることを勧めている。

それ［＝母性愛］は、一つの情熱であると同時に一つの欲望、一つの感情、一つの義務、一つの必然であり、幸福そのものではないでしょうか。そう、これぞまさしく女だけに授けられた特異な生なのです。［…］ああ！ 子どもはどれほど多くのことを母親に教えてくれることでしょう。か弱い生き物に捧げられる不断の保護の中には、私たちを美徳に結びつける希望が満ち溢れているので、女は母親にならない限り、女性本来の領域にいることができないのです。そうなって初めて、女は自分の力を発揮することができるのです。［…］母親ではない女は、不完全な、出来損ないの女です。(322－323)［下線引用者］

このようにルネは、母性愛を謳うあまり、「母親ではない女は、不完全な、出来損ないの女です」とまで断言している。

ルイーズは結婚後もフェリーペとの恋人の関係をそのまま維持していたが、夫とともにルネの元を訪れた時、母親としての幸福に輝くルネの美しさに圧倒される。さらに、ルネがフェリーペと親しげに話をしているのに嫉妬して、いたたまれずそこを立ち去る。その彼女に対して、ルネは叱責の手紙を送る。ルネによれば、ルイーズはフェリーペを夫としてではなく、何の気兼ねもなく翻弄することのできる愛人とみなしている。本当に彼を愛しているなら神のように崇め、恐れるはずだ、だから彼女は彼を本当に愛してはいない、というのだ。それに続けてルネは、次のように言っている。

> あなたはとりわけ、自分の心に正直です。でも世間は、私たち自身の幸福のためにも嘘を要求することがしばしばです。あなたはそこまで身を落とすことは決してないでしょうが。このように世間では、妻が夫に及ぼす支配力を決して表に出してはいけないことになっています。社会的に言えば、夫が妻を恋人として愛していても、妻の恋人のように振舞ってはいけないのと同様に、妻が情婦の役割を果たしてはいけないのです。あなた方は二人ともこの法則に反しています。[…]しかし、それは何でもありません。恋人同士の関係は平等ですが、私の考えでは妻と夫の間では決して平等であってはならないのです。さもなければ、社会の転覆または取り返しのつかない不幸が起きます。無能な男は何だかぞっとしますが、それよりもっと悪いことは無力化された男（un homme annulé）です。そのうちあなたはマキュメールを男の影でしかない状態に追い込んでしまいますよ。彼はもはや自分の意志を失い、自分自身ではなくなって、あなたが好きなように作り上げるものになってしまうでしょう。(332)［下線引用者］

このルネの非難は、彼女自身が「世間」という言葉を使っているように、当時の社会における「男らしさ」「女らしさ」の概念、夫婦についての考えを代弁したものだ。世間の前でも恋人同士として愛情をひけらかすルイーズとフェリーペ夫婦は、当時のジェンダー規範を逸脱していた。とりわ

けルイーズは、夫を「もう一人の私」と呼び、彼女の意志に完全に服従させている。それがルネ［＝世間］の激しい非難の的となっていた。それは単に彼女の「貴婦人らしいエゴイズム」(333) が夫の人間としての尊厳を侵しているからではない。例えば、『あら皮』の主人公ラファエルは、自らを含めた優れた男性特有の「エゴイズム」を擁護し、男への女の隷属を理想の姿だと考えている[10]。それに対して、男女の役割を逆転させたルイーズの行為は、男性優位の社会において、ルネの言葉通り「社会の転覆」と捉えられ、非難に値するものとなる。

一方、ルネは「人前では夫を家庭の権力者として敬う妻」を演じ、夫への忠告や意見は「物陰や人気のない寝室においてのみに」(333) 限っている。夫に対する優越を表に出さないところに「無限の愛情」があると、彼女は自負している。『人間喜劇』には「優れた女性 (femme supérieure)」とバルザックが呼ぶ女性が何人も登場しているが、「優れた女性」が自らの才能を公の場で発揮しようとすると、必ず挫折が待ち受けている。アルレット・ミシェルが指摘しているように、バルザックの世界では、「優れた女性」の幸福とは「エゴイスティックな個性の高揚ではなく、貞淑な中でその優秀な才能を家族の幸福を育むことに用いること[11]」であった。またそれが、当時のジェンダー観であった。こうした点から見れば、ルネはまさに良妻賢母として「優れた女性」の範疇に入る。

夫を「無力化」していると非難するルネの手紙に大きなショックを受けたルイーズは、フェリーペに真意を糾す。それに対して彼は、このまま愛に生きる生活を続けることで、たとえ5年後に死んでも悔いはないと答える。実際彼は3年後に突然、死を迎えることになる。彼の死に先立つ少し前からルイーズの心にも変化が起きる。彼女は子どもが生まれないことへの自責の念に苦しみ、自らの女としての価値観が揺らぎ始める。彼女はルネに次のように告白している。

> 子どものいない女は一種の怪物のようなもの (monstruosité) です。私たちは母親になるためだけに作られたのです。[…] あなたは人生をよく見抜いていました。その上、不妊はあらゆる点でおぞましいものです。(346) ［下線引用者］

ここで使われているmonstruositéという言葉は、医学用語では「奇形」を意味し、ルイーズはまさに、「母親ではない女は、出来損ないの女」というルネの考えを自分のものとしている。夫のフェリーペが臨終の床で彼女に向かって「穏やかな唇に微笑を浮かべながら」死んでいった時、ルイーズは「私の愛が彼を殺した」(355) と自分を責めている。物語第一部は、夫の死を嘆く彼女の姿で終わっている。

第二部はその4年後の話で、4年間音信不通であったルイーズから、ルネに手紙が届くところから始まる。その手紙でルイーズは、マリー・ガストンという4歳年下の美青年と秘密結婚をしたことを告げる。ガストンは、身内としては船乗りの兄が一人いるだけの、無名の貧しい詩人であった。ルイーズは彼の純粋さに惚れ込み、今度はフェリーペとの関係とは逆に、彼を神のように崇拝し、「愛される以上に愛する」(362) 立場に立って彼を「主人 (maître)」と呼び、自ら「彼の下婢」(367) となっている。彼女は世間との交渉を一切断ち、パリ郊外の隠れ家に閉じこもって、二人きりの生活を享受していた。その献身ぶりは、怠け癖のあるガストンを助けて戯曲を仕上げるほどであった（ちなみに二人が戯曲を合作する話は、ジョルジュ・サンドと元恋人のジュール・サンドーがモデルとされている)。

それに対してルネは、「社交界の生活で一人の夫を殺した後で、あなたはもう一人の男を貪り食うために人目を避けて暮らそうと望んでるの？」(370) と痛烈な批判を浴びせかける。それ以来ルイーズの手紙は来なくなるが、その二年後に彼女から再びルネのもとに、次のような手紙が届く。

> 私たちが二人きりで森を歩くとき、彼は私の腰に手を回し、私は彼の肩に手を置いて、二人の体はぴったりくっついて顔と顔が触れ合うほどで、足並み揃えて歩きます。呼吸の合った、いかにも快く一つに溶け合った動きなので、私たちが通り過ぎるのを見た人の眼には、歩道の砂利の上をホメロスの神々のようにすべっていくただ一人の人間のように見えたことでしょう。こうした調和は欲望、思考、言葉の中にも現れます。[…] 確かにその時、私たちの考えは密やかで漠とした祈りのようになり、まるで私たちの幸福の言い訳のように天に昇っていきます。[…] こうした聖なる自然の中で恥じらいがちに交わされる接吻の中に蜜のような甘さ

と深さがどれほど込められているか、あなたが知っていたならば... それは神様がそんな風に祈るために私たちをお造りになったと思えるほどです。(378－379)［下線引用者］

この手紙では、ルイーズと夫の心が一つに調和した至福の状態が描かれ、二人の愛は天への祈りとなって、まさにプラトンの両性具有の夢を実現していた。ただ、一方で彼女は子どもが生まれないことを嘆き、3人の子どもに恵まれたルネの幸せを羨んでもいる。彼女は、「賢明にも社会の法則を遵守した」ルネとは違い、自らを「社会の外」(383) に置き、社会から疎外された自らの立場を自覚している。それに対して、ルネはルイーズの愛情至上主義を槍玉にあげ、結婚生活で大事なのは行き過ぎた情熱ではなく、快楽を伴わない穏やかな愛情だと考え、「妻」と「愛人」の二つの役割を演じようとするルイーズを「結婚制度を堕落させている」(385) と批判している。

その後ルネのもとに、「不幸がやってきました」というルイーズの手紙が届く。ガストンが彼女に黙ってパリに出かけ、美しいイギリス人の女性の元に通っているという。しかも彼女はガストン夫人と名乗り、彼そっくりの2人の子どもまでいた。それを見て絶望したルイーズは、死を覚悟して自ら肺炎にかかる。彼女の悲痛な手紙に驚いたルネが調査したところ、ガストン夫人はマリー・ガストンの兄の妻で、夫を亡くして困っている兄嫁と幼い子どもたちを、マリーが妻のルイーズに頼らずに援助しようとしていたに過ぎなかった。しかし、ルネが朗報を持ってルイーズの所に駆けつけた時は、彼女の容態はもう手の施しようのない状態であった。ルイーズはルネに「情熱を、そして愛情でさえも結婚の基盤にすることはできないのでしょう」(401) と述べて、ルネの言い分が正しかったことを認める。そして、嘆き悲しむガストンに見守られ、最後まで気品を失わずに死んでいく。

以上、物語の筋を追ってきたが、二人の女性の特徴を図式化すると次のようになる。

ルイーズ	vs.	ルネ
金髪、青い眼		黒髪、黒い情熱的な眼
恋愛結婚		政略結婚
情熱、絶対的な愛		(夫への) 友情、情熱を伴わない夫婦愛
快楽、逸楽、官能		自己犠牲、献身、苦悩、義務
天への飛翔		大地と結びついた性質
詩、理想、無限		計算（算術)、現実
狂気、過剰、想像力		理性、節制、秩序
貴族的価値観		ブルジョワ的価値観
愛人（amante, maîtresse)		母親（mère)、家族・家庭（Famille)
不毛性、死		豊穣性、繁栄

この小説については、「情熱に対する母性愛の勝利」、「個人的な快楽の満足［＝恋愛結婚］に対する義務・自己犠牲［＝政略結婚］の勝利」という解釈が大勢を占めている。例えば、1846年に出版された批評書の著者は、個人の快楽が最も尊ばれるご時世に、この小説では妻、母としての女のあらゆる喜び、その栄光が描かれていると褒め称え、それがこの世で一番「可能な幸福」をもたらすとしている[12)]。というのも、情熱的な恋愛の末に結婚して得られる「理想的な幸福」は、些細なことで乱され、失われる恐れがあるというのだ。この本の著者は、ルイーズが臨終の床でルネに言うセリフ：「女は弱い存在なので、結婚するにあたって、その意志をすべて男のために犠牲にしなければなりません。その代わり、男の方は女のために自分のエゴイズムを犠牲にしなければいけません」（401）を引いて、これこそが「キリスト教的な結婚」の良さを正式に認めたものだとしている[13)]。弱者である女性は夫に服従しなければならないが、その見返りとして夫は暴君として振舞うのではなく、愛によって妻を包み込むべきだというのが、この著者の言う「キリスト教的な結婚」で、バルザックはそれを見事に描いたと賞賛している。さらに続けて彼は、次のように言っている。

> 女は母親になるために造られた。女性は家庭の源であり、母性愛、その義務、その苦しみ、それこそが女性が味わう特別な喜びなのだ[14)]。

上記の文章には、母になることを女性の「天職」と考える当時の女性観が反映され、著者はルネの中にその理想像を見ている。

19世紀の批評家だけに限らず、現代においてもルイーズの生き方を否定的に捉える批評家が多く見出せる。モーリス・バルデッシュは、ルイーズを「自らの若さと愛の狩猟に酔いしれるアマゾネス[15]」、または「美しい人獣（bel animal humain）[16]」と呼び、彼女が実現したのは愛の夢ではなく、彼女にとりついた固定観念に過ぎず、彼女は必然的に狂気に導かれると考えている。それに対して、現実を「誠実に」受け入れたルネは、最後には、美しい子どもたちと田舎の快適な城、自信を取り戻した夫に囲まれ、「幸福そのものの姿[17]」で立ち現れるというのが、バルデッシュの見解であった。

クロード＝エドモンド・マニーは、ルイーズのナルシシズムを批判し、彼女にとって恋人は自らを映し出す鏡に過ぎないと言っている。彼によれば、「メドゥーサに魅入られたかのようにマキュメールが彼女に見惚れることで初めて、ルイーズの美しさが真に存在感を持って現れる[18]」という。そして、「もう一人の私」と彼女が呼ぶマキュメールの偉大さそのものが彼女にとっては、彼女自身の偉大さの証であり、彼をあたかも彼女の「装身具」のように扱っていると非難している[19]。彼の論に従えば、ルイーズは相手の男性が彼女以外のことに関心を持ち、少しでも彼自身の意志、すなわちNon-Moi, Non-Louiseの部分を持つことを許そうとはせず、最後まで自己愛に囚われた女性であった。

ロジェ・ピエロも、ルイーズの生き方を否定的に捉えた一人である。彼はルイーズの二度の結婚に関して、「一見正反対のように見えて、どちらの結婚も二人の男性を不毛な孤独に追い込むもので、不健全で死の萌芽を孕んでいる[20]」と述べている。それに対してルネの方は、結婚を二人の男女の分別ある結合、社会的役割を担ったものとみなし、夫に自信を取り戻させ、彼が自己実現を果たす手助けを辛抱強く着実に行ったと高く評価している。最後にルイーズがルネの結婚観を認めて死んでいくことで、道徳の「教訓的な勝利[21]」がもたらされた、というのが彼の結論である。

ではバルザック自身は、自ら作り出したこの二人の女性をどのように捉

えていたのだろうか。ジョルジュ・サンドはバルザックに宛てた手紙の中で、この小説について「私は子どもを生む方の女性を立派だと思いますが、愛で死ぬ方の女性を熱愛します[22]」と書いている。それに対してバルザックは、「僕はルネと一緒に長生きするよりも、ルイーズに殺される方がましです[23]」という返事を送っている。ルイーズは死の床で、ルネの生き方を認める一方で、若くて美しいまま30歳で死にたいという自らの願いが叶ったと満足している。彼女は次のように言っている。

> 私は人生を味わい尽くしました。世の中には人の上に立つ仕事に60年間従事して、本当に生きたのは２年でしかないという人がいます。私の場合は逆に、わずか30年しか生きていないように見えて、実際は60年分の愛を味わったのです。(400)

ルイーズは、ちょうど『あら皮』の主人公が「長生きするために感情を殺すか、情熱の殉教者となることを受け入れて若くして死ぬか[24]」の二者択一の生き方のうち、命を縮めても激しい欲望の中で生きることを選択したのと、同じ生き方を選び取っている。ボードレールがバルザックの世界を評して「すべての登場人物が彼自身［＝バルザック］を活気づける激しい生命力を授けられている[25]」と語ったように、ルイーズは真にバルザック的人物であった。

また、彼女はルネのような「計算」も「分別」も持たずに、純粋に愛のみに生きようとした。スタール夫人の『コリンヌ』を愛読する彼女はまさに、コリンヌのような詩人であった。ただし、コリンヌが聴衆を必要とする即興詩人であるのに対し[26]、ルイーズは専ら自らの内に沈潜し、自らの愛を歌い上げる詩人であった。しかも、その愛は祈りにも似た天上的なものであった。

この小説の最初の構想ではフェリーペの死後、ルイーズは絶望して修道院に入ることになっていたのが、決定稿ではマリー・ガストンとの二度目の結婚という筋書きに変更された。それは、バルザックがルイーズに愛情至上主義を全うさせようと考えたからではないだろうか。彼女は、愛において「主人」と「奴隷」の二つの役割を演じたいと望んでいたが、二度の

結婚によってそれを実現することができた。さらにフェリーペという「美しい魂」と、マリー・ガストンという「美しい肉体」を持った理想的な男性二人に愛され、賞賛されて死ぬのは本望だと彼女自身、述べている。確かに、先に触れた批評家のマニーが指摘しているように、彼女の愛にはエゴイズム、ナルシシズムが認められる。しかし別の見方をすれば、彼女が愛する男性の中にNon-Moiを認めなかったのは、相手との一体感を願うあまり、二人の魂の完全な融合、互いに透明な関係を望んだ結果とも言える。「絶対的な無限の愛」を求めるルイーズは、『人間喜劇』に登場するバルザックの特権的人物 ―すなわち『ルイ・ランベール』の主人公や『知られざる傑作』の天才画家、『ガンバラ』の同名の主人公、さらには『絶対の探究』の主人公など― と同じ「絶対の探究者」の範疇に入る。こうした人物はそれぞれ、思想や絵画、音楽の分野で「理想」を求めながら、地上的な制約から免れることができず、最後は挫折、死を余儀なくされる。天上に高く上昇した者は、その「墜落」も命取りになるのだ。

また、ルイーズが滅び、ルネが生き延びて社会的に成功した背景には、歴史的・時代的要素が関わっている。ルネが「家庭」を社会の基盤と考えるブルジョワ的価値観を表しているとすれば、「打算」や「偽善」と無縁の、誇り高いルイーズは、貴族的価値観の持ち主である。ルイーズの「気品」と「潔さ」は彼女が慕っていた祖母譲りのもので、彼女の祖母は18世紀ロココ時代を代表する貴婦人であった。

この物語が始まる1823年は王政復古時代に当たり、まさに、貴族的価値観からブルジョワ的価値観へと移行する過渡期に位置していた。それはちょうど貴族階級が凋落の途を辿っていく中で、最後の輝きを見せていた時代、経済的にはブルジョワ階級に劣っていても、精神的な優位をいまだ誇っていた時期である。1830年の七月革命を経て七月王政になると、「フランス市民の王」を標榜するルイ=フィリップの下、ブルジョワの覇権が確立する。「現実」との妥協 ―それはブルジョワ的価値観との妥協に他ならない― を図らざるを得なかった地方貴族の娘ルネとは違い、ルイーズはパリでも由緒ある貴族の家柄を誇るフォブール・サン=ジェルマンの一員であった。それゆえルイーズは、ボーセアン子爵夫人（『ゴリオ爺さん』

に登場し、最後には社交界からの引退を余儀なくされる）や、ランジェ公爵夫人（同名の小説の主人公で、最後には俗世間と縁を切って修道院で死ぬ）などフォブール・サン=ジェルマンを代表する女性たちと同様に、滅びゆく貴族階級の象徴であった。バルザックは、これら18世紀の名残りを留めた偉大な貴婦人たちが社会の表舞台から退場していく様を、愛惜の念を込めて描いている。

ところで、これまでルネとルイーズという二人の女性を対立の構図のもとに見てきたが、この小説を注意深く読むならば、様々なねじれ現象が起きていることに気づく。愛のない結婚を批判し、愛情至上主義を全うするルイーズには、多分にジョルジュ・サンドの面影が投影されている。それは、バルザックがルイーズの祖母を描くにあたって、サンドの祖母マリー・オーロール・ド・サックスをモデルにしたとされることからも覗える[27]。サンドは黒髪に、黒い情熱的な眼で特徴づけられる女性で、『ベアトリクス』に登場する女性作家カミーユ・モーパン —作者自身が認めているように[28]、サンドがモデルであった— の身体的特徴にそっくり受け継がれている。それに対して、カミーユと対照を成すベアトリクスが金髪碧眼の美女として登場する。ところが『二人の若妻の手記』では、サンドがモデルと考えられるルイーズは金髪に青い目で、むしろ、ルネの身体的特徴がサンドにあてはまる。そこにねじれが生じているわけだ。また、すでに見たように、ルネの結婚制度への異議申し立ては、サンドの主張と重なり合う。ルイーズがルネをからかって「コルセットをつけた博士（docteur en corset）」と呼んでいるように、サンドのように論理的な主張を展開するのはルネの方だ[29]。

その上、ルイーズは官能的な快楽を擁護する立場にあるが、彼女の愛の描写は詩情に満ち溢れ、抽象的、観念的なものである。むしろルネの方が官能性、女のセクシュアリティに関して —それはすでに見たように、母性愛の中にルネが見出したものであるが— 大胆な描写を行っている。その証拠に、この小説が「プレス」紙に新聞小説として掲載された時、編集者が当局の検閲を恐れて自己検閲を行ったのが、とりわけルネの手紙に関してであった[30]。つわりの場面では、前に挙げた引用下線部（8-9頁参照）

の「恋愛の（amoureuses）」が「快い（délicieuses）」に、「官能的な（volupteuses）」が「えも言われぬ（ineffables）」に、また「腐ったオレンジ（oranges pourries）」が「駄目になったオレンジ（oranges gâtées）」に、「むかつくような悪臭（puanteur）」が「匂い（odeur）」といった差し障りのない言葉に置き換えられている。授乳の場面（9-10頁参照）でも「恋人の愛撫（caresses d'amant）」から「恋人（amant）」の語が消え、「欲望（désirs）」という語も削除され、引用で波線を引いた部分は文全体が削除されている。先に見たルネのセリフ：「父親ですって？ もし彼が赤ん坊を起こそうとしたなら、殺しかねないわ」も「殴りかねないわ」と穏便な表現に置き換えられている。それほどルネの言葉は生々しい身体性と激しい情熱、官能性に満ちている。したがって、ルネは必ずしも分別をわきまえた女性ではなく、ルイーズと同じくらい、またはルイーズ以上に激しい情熱を内に秘めた女性であった。

アルレット・ミシェルが指摘しているように[31]、ルネがルイとの結婚を承諾したのは、美徳や理性によるものではなく、支配欲を満たすためだったとも考えられる。その証拠に、彼女がルイと結婚するにあたって、まず彼に要求したのは、彼女の「完全な独立」とその「自由意志」(253) を尊重することであった。夫婦愛についての彼女の考えは、次のような言葉に明確に現れている。

> 私が考える夫婦愛とは、妻に希望をまとわせ、女王にし、無尽蔵の力と生命の熱を与えるもので、その熱のおかげで周りのすべてを花開かせるのです。女性が誰にも支配されず完全に自由であればあるほど、愛と幸福を一層長く持続させることができるのです。しかし私たちの内密の取り決めは秘密のヴェールに覆って、誰にも知られないよう［夫のルイに］強く求めました。妻に服従する夫はまさに笑い者になってしまいます。妻が夫に及ぼす影響は完全に秘密にしておかねばならないのです。(254)［下線引用者］

このように、ルネの方が夫を支配し、夫に対する優越意識を持っている。実際、彼女の言葉には「君臨する（régner）」「要求する（exiger）」「強制

する（obliger）」といった語がちりばめられ、それに対して夫は妻に服従する立場にあった。それゆえ、ルネは夫にひたすら従順に従う献身的な女性というイメージからはかけ離れている。要するに、ルネもルイーズと本質を同じくする女性で、ルイーズとの違いは、引用最後の下線部のように、夫婦の権力構造を世間に隠すか —アルレット・ミシェルはそれを「美徳のマキャヴェリスム[32]」と呼んでいる— 隠さないかだけにあった。

思い起こしてみれば、ルイーズとルネは出発点において「持参金のない貴族の娘」という同じ立場に立ち、二人は一心同体のような関係にあった。物語冒頭で、ルイーズはルネに対して、パリと田舎でのそれぞれの生活を互いに報告しあうことで、相手の人生を自ら味わい、互いの生活を二人で分かち合いたいと書いている。ルネもルイーズに同様のことを書き送っている。

> 私の親愛なるルイーズ、あなたは<u>私の存在のロマネスクな部分</u>になってくれるでしょう。あなたの恋物語をたっぷり聞かせて。舞踏会やお祭りの様子を描いて下さい。あなたがどんな衣装を着て、どんな花があなたの美しい金髪を飾るのか、殿方の言葉やその様子も話して下さい。あなたが耳を傾け、ダンスをし、握られた指先を感じる時、<u>あなたは［一人ではなく］二人なのです（tu seras deux）</u>。あなたがラ・クランパード —それが私たちの田舎の屋敷の名前です— で家族の母親になっている間、私はゆっくりパリで楽しみたいものです。女性一人だけと結婚したと信じているなんて［ルイは］何て気の毒な人でしょう！ 実は<u>二人の女性</u>と結婚したことに、彼は気づくでしょうか。（223）［下線引用者］

実際、ルネはルイーズを通して情熱的な恋愛を味わい、ルイーズはルネを通して母親の気持ちを追体験している[33]。マックス・アンドレオリの言葉を借りるならば、二人の女性は「女性原理そのものの二重の化身」であり、「女性原理が二つに分かれ、類似すると同時に相反する二人の人物となって対立している[34]」。言い換えれば、ルイーズとルネは全く異質な存在として対立するのではなく、どちらも「女性原理そのもの」の象徴であり、その関係は「絶対的な愛情」vs.「母性愛」、「恋愛結婚」vs.「政略結婚」といった二項対立に単純に還元できるものではない。ルネ自身が「私たち二

人のうち、どちらが間違っていて、どちらが正しいのでしょうか。恐らく、私たちは二人とも等しく間違っていると同時に正しいのでしょう」(272)と語っている。これが作者バルザック自身の答えではないだろうか。確かにルネの母性愛は偉大で、その崇高な自己犠牲の末に、彼女は社会的な幸福を勝ち取ることができた。しかしこの物語の最後は、ルネの幸福な姿で終わるのではなく、夫に向けた彼女の次のような叫び声で終わっている。

> 胸が張り裂けそうです。私は今、経帷子に包まれた彼女を見たところです。彼女は紫色を帯び蒼白くなっていました。ああ！ 子どもたちに会いたい！ 私の子どもたちに！ 私の目の前に子どもたちを連れて来て！ (403)

そこにはルイーズの厳然たる死を前にしたルネの恐怖が描かれているが、それと同時に、これまでルイーズを通して激しい情熱の喜びを味わってきたもう一人の自分 ―言わば、彼女の分身― を失ったことが、ルネに自分の身が引き裂かれるような悲しみをもたらしたのではないだろうか。ルイーズという半身をもぎ取られたルネはもはや、子どもたちへの母性愛を拠り所にして生きるしかない。それが「私の目の前に子どもたちを連れてきて！」という錯乱に近い叫びとなっているように思える。

最初に述べたように、この小説は『人間喜劇』で唯一の書簡体小説となっている[35]。バルザックの作品の多くが三人称の小説で、作者は登場人物すべての運命を自在に操る「神」の視点に立っている。また、一人称の小説では、「私」という主人公の眼を通して一元的な視点で語られる。それに対して書簡体小説は、手紙を書く人物それぞれの視点に立った多元的な角度から描かれる。とりわけ『二人の若妻の手記』は、フェリーペ、ルイなどの手紙が多少入るものの、ほとんどがルイーズとルネの手紙から構成されている。しかも、作者が介入して解説を加えることは一切ない。そうすることで、結婚に関する相反する二つの主張をそれぞれ極限にまで推し進め、対立させながらも、どちらかに重きを置くことなく、並列したままで物語を終えることが可能になっている。

書簡体小説というジャンルは、ルソーの『新エロイーズ』やラクロの

『危険な関係』など18世紀に隆盛を極めたが、19世紀、とりわけ1840年代にはもはや時代遅れになっていた。バルザック自身が序文で[36]、「書簡体小説が廃れてまもなく40年になる」と述べている[37]。その古い手法をあえて彼が用いたのも、作者の立場を離れて、それぞれの女性になりきってその主張を繰り広げたかったからではなかろうか[38]。そうすることで、二人の女性のうちどちらの主張を取るのか、または別の道を探るのかの判断は読者に任されることになる。バルザックは、結婚に関する大きな問題を読者に直接投げかけ、読者自身が考察を深めるよう促そうとしたのではなかろうか。

もう一つ、この小説の特徴を挙げるならば、女性の力、そのエネルギーの大きさがクローズアップされていることだ。ルネはその有り余るエネルギーを夫に吹き込み、家庭を活気づける源となっている。それに対して、夫のルイは妻の言いなりになる意志の弱い人物で、子どもと妻の密接な絆から完全に排除されている。ルネの豊饒性も、アン・マクコールの解釈によれば[39]、その過剰さによって男の精気を吸い取る危険性すら孕んでいる。ルイーズに関しても同様で、彼女の二度目の夫マリー・ガストンは脆弱で怠惰な詩人で、ルイーズの方が言わば、彼を囲う立場にあった。さらに「偉大な男性」と形容されるフェリーペも例外ではない。彼がフランスに来た時には、すでに政治生命を断たれ、彼自身、自らを「破壊された自我(le *moi* détruit)」(226)、または「老け込んだ青年」(227) と呼んでいる。まさにルイと同じ立場にあったのだ。フェリーペは母からも許婚からも愛されず、祖国からも見捨てられて、「死の最後の恵み」(227) を待つばかりだと弟に告白している。したがって、彼はルイーズに出会い、彼女に「無力化」される前にすでに、そのエネルギーの大半を失っていた。

こうした男たちの「無力・無能 (impuissance)」な状態は、この小説を執筆していた1840年頃、体力の衰えを感じ始めた作者自身の姿が投影されているだろう。それと同時に、1840年代は、1821年のナポレオンの死後、「父権 (Paternité)」の弱体化が進み、それが露呈する時期にあたる。こうした中で台頭してくるのが女性の力であった。したがって、「男性原理」＝行動力、積極性／「女性原理」＝自己犠牲、消極性といった従来の

図式には必ずしも当てはまらない、エネルギーに満ちた女の力をバルザックが捉えて描いたのが『二人の若妻の手記』であったとも考えられる。そこに、この小説の新しさが見出せる。

このように、バルザックの『二人の若妻の手記』は、恋愛や結婚、男女のあり方について多元的な光を当て、現代に通じる様々な問題提起を行っていると言えよう。

【註】

1）正確に言えば、『谷間の百合』もフェリックス・ド・ヴァンドネスが恋人のナタリーに宛てた手紙（その中で、モルソフ夫人との恋愛が語られる）から構成されている。しかし、最後にナタリーの手紙が挿入されるだけで、残りはすべてフェリックスの長い手紙で、書簡体というよりも一人称小説に近い。『海辺の悲劇』もルイ・ランベールが伯父に宛てた手紙からなるが、『谷間の百合』と同様に、一人称小説に近い。

2）Balzac, *Lettres à Madame Hanska*, Bouquins, 1990, t.I, p.442.

3）『ベアトリクス』に関しては、拙論「『女流作家』と『女性作家』—バルザックにおける女性作家像　カミーユ・モーパン」（大阪府立大学女性学研究センター『女性学研究』No.13, 2006）を参照のこと。

4）Balzac, *Mémoires de deux jeunes mariées*, Pléiade, t. I , p.244. 以下、『二人の若妻の手記』からの引用は本文中に頁数のみを記す。

5）Balzac, *La Femme de trente ans*, Pléiade, t. II , p.1119.

6）「私が奴隷であなたが主人であることはわかっています。この国の法律があなたを私の主人にしたのです。あなたは、私の体を縛り、私の手をがんじがらめにして、私の行動を左右することができます。あなたは強者の権利を手中にしています。社会がそれを認めているのです。でも、私の意志に関しては、あなたには何もできません。神様のみが私の意志を屈服させ、弱めることができるのです。だから、法律でも牢獄でも、私に効き目があると思える拷問道具を探してご覧なさい。それは、あたかも空気を扱うようなもの、虚無を捉えるようなものに過ぎません」（George Sand, *Indiana*, Folio classique, 1984, p.232）。

7）小倉孝誠『＜女らしさ＞の文化史』、中公文庫、2006年、45頁。医者の言説に関しては、上記の書物の他にジャン=ピエール・ペテール「医者の女性像」、ジャン=ポール・アロン編『路地裏の女性史　19世紀フランス女性の栄光と悲惨』所収、片岡幸彦監訳、新評論、1984年も参照のこと。

8）「愛は私にとって神の姿にかたどられたあらゆる美徳の原理をなすものです。愛はすべての原理と同様に計算されるものではなく、私たちの魂の無

限なのです」(260-261)［下線引用者］。

9) Balzac, *Correspondance*, Classiques Garnier, t.Ⅳ, 1966, p.406.

10)「貧しくて誇り高く、芸術家肌で創造力に恵まれた男は、人を傷つけるほどのエゴイズムで身をかためていないだろうか。彼の周りには何かしら思考の渦巻きのようなのがあって、その中にすべてを、恋人ですら包み込んでしまうから、恋人はその動きに従わざるをえない。［…］身も心も本当の妻というものは、彼女の人生、力、名誉、幸福がそこに宿っている男が向かうところに流されるがままになるものだ。優れた男に必要なのは、ひたすら男の欲求に沿おうと努力するオリエントの女だ」(Balzac, *La Peau de chagrin*, Pléiade, t.X, pp.132-133)［下線引用者］。

11) Arlette Michel, *Le mariage chez Honoré* de Balzac. *Amour et féminisme*, Belles Lettres, 1978, p.109.

12) Alphonse Du Valconseil, *Revue analytique et critiques des romans contemporains*, éd. Gaume Frères, 1846, t. II, p.160.

13) *Ibid.*, p.167.

14) *Ibid.*, pp.167-168.

15) Maurice Bardèche, Notice à l'édition Club de l'Honnête Homme de *Mémoires de deux jeunes mariées*, dans *Œuvres complètes de Balzac*, t. I, 1956, p.212.

16) *Ibid.*, p.215.

17) *Ibid.*, p.213.

18) Claude-Edmonde Magny, Préface à l'édition Le Club Français du Livre de *Mémoires de deux jeunes mariées*, dans *L'Œuvre de Balzac*, t.6, 1966, p.17.

19) *Ibid.*, p.18.

20) Roger Pierrot, Introduction à l'édition Pléiade de *Mémoires de deux jeunes mariées*, t.I, 1976, p.181.

21) *Ibid.*, p.182.

22) Balzac, *Correspondance*, t.IV, p.407.

23) *Ibid.*

24) Balzac, *La Peau de chagrin*, p.118.

25) Cité par Albert Béguin, *Balzac lu et relu*, Seuil, 1965, p.21.

26) Cf. 梶谷温子「スタール夫人『コリンヌあるいはイタリア』」、上村くにこ、西川祐子編『フランス文学／男と女と』所収、勁草書房、1991年。

27) ルイーズの祖母の部屋を描写する場面で、「サックス元帥から送られたプレゼント」(200) の柱時計に言及され、サンドの祖母の父親モーリス・ド・サックス元帥の名が挙げられている。ロジェ・ピエロは、18世紀の貴婦人の典型として描かれるルイーズの祖母の生き方そのものが、サンドの

祖母を彷彿させるとしている（Roger Pierrot, *op. cit.*, p.188）。

28) バルザックは、ハンスカ夫人に宛てた手紙の中で、「そう、デ・トゥーシュ嬢［＝カミーユ・モーパン］はジョルジュ・サンドです」と明言している（Balzac, *Lettres à Madame Hanska*, t.I, p.502）。

29) バルザックの作品に対するサンドの影響に関しては、Thierry Bodin, « Du côté de chez Sand », in *L'Année balzacienne 1972*を参照のこと。

30) バルザックは編集者が勝手に行った書き換えが気に入らず、スヴラン版では元の原稿に戻した形で出版している。

31) Arlette Michel, « Balzac juge du féminisme. Des *Mémoires de deux jeunes mariées* à *Honorine* », in *L'Année balzacienne 1973*, p.188.

32) Arlette Michel, Introduction à l'édition Garnier-Flammarion de *Mémoires de deux jeunes mariées*, 1979, p.36.

33) ルネはルイーズの「幸福な結婚を享受」（310）し、ルイーズはルネに「私はあなたを通して母親になれる」（316）と語っている。

34) Max Andréoli, « Un roman épistolaire : Les *Mémoires de deux jeunes mariées* », in *L'Année balzacienne 1987*, p.278.

35) 書簡体小説としての『二人の若妻の手記』に関しては、上記のAndréoliの論考の他に、Rose Fortassier, « Balzac et le roman par lettres », in *Paysages baroques et paysages romantiques. Le roman par lettres Paul Claudel*, Belles Lettres, 1977、柏木隆雄『謎とき「人間喜劇」』、ちくま学芸文庫、2000年、394-398頁を参照のこと。

36) Préface de la première édition de *Mémoires de deux jeunes mariées*, Pléiade, t.I, p.193. この序文は初版（スヴラン版）にのみ掲載され、フュルヌ版からは削除された。

37) ロジェ・ピエロが指摘しているように、バルザックは、約40年前に出版されたスタール夫人の『デルフィーヌ』（1802）、セナンクールの『オーベルマン』（1804）などを念頭においていた（Roger Pierrot, *op.cit.*, p. 1251）。

38) バルザックは序文の中で、実在の女性から手紙を託されたと語り、あたかも女性の手になる手紙であるかのように装っている。それは、書簡体小説の常套手段であるが、バルザックはその形式を踏襲することで、女性の気持ちにより一層寄り添い、同化しようとしたように思える。

39) アン・マクコールは、ルネと直接会うなど接触の機会があると、特に男性がやつれ、精気を失っていくことを指摘し、ルネの「豊饒性」を「憔悴をもたらす豊饒性（fertilité anéantissante）」と呼んでいる（Anne E. McCall-Saint-Saëns, « Pour une esthétique du père porteur : les *Mémoires de deux jeunes mariées* », in *Balzac. Une poétique du roman*, XYZ éditeur, Montréal, 1996, p.304）。